

「神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった」

ヨハネによる福音書 3章16節

聖学院大学 こども心理学科長 窪寺 俊之

今日ここにおられる方々は、入学の時に聖書をお買いになられたと思います。その聖書は今どこにあるでしょうか？ある方は自分の机の上に、ある方はロッカーの中に、ある方はどこにあるのか分からないという方もおられるかもしれません。授業の時や礼拝の時に、ちょっと開くかもしれませんが、ほとんどの方はあまり読んだことがないとおっしゃるかもしれません。確かにこんなに厚い聖書を読むのは大変だと思っておられるかもしれません。もっと薄くてもっと分かりやすかったら、私も読む気になるのになあと思っておられる方もおられるかもしれません。

今日、読んでいただいたこのヨハネによる福音書の3章16節というところは、非常に短いところですが、聖書全体が伝えようとしていることのエッセンスがこの1句の中に示されていると、多くの人は言っています。ですから、このヨハネによる福音書の3章の16節は、「聖書の中の聖書だ」と多くの方が言います。聖書全体を読まなくても、この1句をしっかりと理解し、あるいはこの聖書に立って人生を生きれば、その人の人生は必ず変わっていく、あるいはその人の人生はどんなところを歩んでいるときにでも、私たちに希望を与えてくれる聖書の箇所だと思います。

今、読んでいただきましたが、もう一度読んでみますと、「神はそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」そこで丸が付いています。そして次に「ひとり子を信ずる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ここで丸が付いています。つまりこの1句には2つのことが記されています。神がこの世を愛されたということが1つです。その愛の大きさは、神様がそのひとり子を差し出してもかまわないと思うほどの大きな愛で愛されたと書いています。小さな愛ではありません。私たちが救うために、神様が大きな犠牲を払ってでもかまわない。それほどまでに、私たちが救おうとなさったと書いてあります。それはいい加減の愛ではない、本気の愛、決して偽らない愛をもって、神様は私たちが救おうとなさったと聖書は書いています。

神様の目には、私たちは価値のある者だということです。それは、私たちは、一人一人は神様の前に尊い者として受け止められているということを示しています。たとえ私たちが失敗しても、あるいは挫折しても、あるいは自信を失ったときにでも、神様の目には私たちは尊い者、あるいは犠牲を払ってでも買い求めたいと思うほどの存在だと。そう神様には映っていると、そう聖書は言っています。

しかし、残念なことに、私たちはそんな神様の熱い思いに、実は気が付いていません。神様に目を向けようとしなかったり、あるいは私たちは自分の不幸を自分で呪ったりします。あるいは人と比較して自分は惨めだと思えます。それが私たちの自分理解です。ところが、神様は私たちが尊いのだと、神様の方でそう受け止めてくださっていると、この聖書は言っています。自分はひとりぼっちだと思ったり、自分には良いものがないと思ったり、神様はそのひとり子をお与えになったほどに私たちが愛して

いてくださるという、この御言葉を、私たちは心の中に思い起こしたいと思います。神様の目には、私たちはかけがえのない、尊い者だと映っている。そう神様は受け止めていてくださる。それがこの聖書が私たちに語っていることです。

もう一つのことは、「それは誰一人滅びないで、永遠の命を得るためである。」という2番目の文です。神様は私たちのために犠牲を払ってくださった。理由は、私たちが一人も滅びることがないためだと書いています。滅びるとは、どんな意味でしょう。自分は元気に生きていて、滅んでなんかいないと言う人がいるかもしれません。ここでも滅びは、肉体的な意味ではなくて、精神的な意味です。もし私たちが、生きてるのがつらくて死にたいと思ったとしたら、それは滅んでいる人間と言えるでしょう。また自分を愛することができなくて、生きていく意味がつかめずに虚無的になったり、自暴自棄になっていたら、それも自分は人間として滅びているということでしょう。ある方は、どうせ人間なんて自分勝手なんだからと言って、投げやりになっているかもしれません。それも滅びの人生です。つまり私たちが預かっているこの人生、この命を、輝きを失ってしまったならば、それは滅んでいる人生と言うことができるのではないのでしょうか。

神様は、私たちが生き生きと生きてほしいと願っている。永遠の命を得るとありますが、永遠の命とはそれはどんな意味でしょう。永遠の命とは、それはいつまでも死なないで生きる命でしょうか。人間は必ず死にます。肉体的命は必ず終わりがやって来て、そして私たちは、いつかはこの肉体を離れなければなりません。永遠の命と言っているのは、それは肉体的な命が終わりになったときにでも、私たちの死の向こうに希望を見出し、その先に神と共に生きる、新しい世界を夢見ることのできる命です。永遠の命が与えられると、暗闇の中に光を見つけることができます。絶望の中にも希望を見つけることができます。倒れてもまた立ち上がる力が与えられます。争いや、醜く憎しみ合っているところにも平和が与えられてきます。

私は、このヨハネによる福音書の3章16節のことばが大好きです。そして私は、この3章16節のことばで自分が支えられて来たように思います。私は、健康がすぐれないで1年療養したことがあります。そして、1年学校を落第したことがあります。家が貧しくて、大学に入るのに5年遅れて大学に入りました。だから、人から取り残されたという孤独感をずっと持ってきました。そのたびに思い出したのは、この「神はその独り子をお与えになったほどに私たちを愛してくださいました」という、そのことばです。独り子の命と引き替えに神様は私たちを救おうとされた。それが私を支えてくれました。

神様は決して裏切らない。私たちが信じて、絶対に裏切らない。私が人生を投げ出したり、あるいは自分の人生を呪ったり、あるいは人の人生をうらやんだりするようなことが出てきます。その時に、このことばは私を励ましてくれます。力を与えてくれます。光を見い出すことができるように導いてくれます。永遠の命は、決して絶望することに終わりません。

今日、皆さん方に入り口のところでお渡しした、小さな葉があったと思います。それは、ある教会の高齢のご婦人の方が作られた物です。小さな葉ですけれども、そこに描かれてあるきれいな絵があります。それはこのご婦人が描いたものです。そしてその絵をパソコンに入れて、そして印刷をして、それを切って、そしてそこに一つ一つ全部そのご婦人がリボンを付けてくださって作った物です。この葉を作ったそのご婦人の方に、私は実はお会いしたことはありません。でも、その方が書いた小さなこの

メモみたいなものがあります。ちょっと読んでみます。「35年間会社で働いて、60才の時に仕事を辞めました。その時、私は仕事をもぎ取られ、生きる意味をなくしてしまいました。その時、長いこと離れていたイエス様のところに私は戻って行きました。そしてこの葉を作ることを思い浮かびました。この絵に御言葉を付けたこの葉が、多くの人に読んでいただいて、『それは励ましになった』とおっしゃってくださいます。初めの頃は、幼稚なもので、渡した人が喜んでくださり、『聖書って良いことばがあるのですね』と言われるのは、この上もない喜びでした。御言葉で救われた人の話は良く耳にするので、小さな葉でも大きな力になることを思います。この絵を描くには何日もかかるのですが、絵が出来上がると御言葉はすぐに与えられます。そんな不思議なことが何度もあって、イエス様が共にいて働いてくださっているのを、私は確信しています」。そうこのメモに書いてあります。私は、このメモの中で心を打ったのは、仕事をもぎ取られ、生きる意味をなくしかけていた時、長いこと忘れていたイエス様の手にすがったことです。そして生き返った私です、というところですよ。

イエス様に帰る。その時、私たちはそこで、新しい生きる人生の意味を見出すことができると、聖書は言っています。この葉をくださったのは、ご主人ですけれども、こう私に言いました。「先生、もらってください。家内が作った物です。皆さんにもらってもらったら、家内が喜びます」と、私に手渡してくださいました。この葉を作ったご婦人に、私は会ったことはありませんけれども、このご婦人の顔が目には浮かびます。それはこの葉を作りながら、その御言葉を思い描き、そして一人一人の手に御言葉が伝わっていくことを願っているご婦人の顔です。それは、作りながら輝いているに違いありません。

神様は、「独り子を信じる者が、一人も滅びないで永遠の命を得るためである。」とおっしゃっています。主イエス様を心に迎える人には、永遠の命を与えてくださる。それが、聖書が私たちに約束していることです。

聖学院大学で学ぶ私たち一人一人が、神様の永遠の命を頂いて、輝いて生きる人生を見出すことができるように、そう祈っていきたい。それが、聖書全体が私たちに願っていることだと思います。

ひと言お祈りします。

父なる神様、今日私たちを生かして下さってありがとうございます。私たちは、勉強やバイト、人間関係や家庭で思いがけず辛い経験をして自分が嫌になり、人が嫌になったりすることがあります。神様の優しいまなざしを思い出し、あなたが語ってくださる、「永遠の命のことば」を学ぶことができますように。「永遠の命のことば」を抱いて、前に向かって歩み出すことができますように。あなたが与えてくださる勇気を持って、自分の人生をしっかりと輝かせることができますように。

私たちの主イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン

2016年1月13日 聖学院大学 全学礼拝